

短歌

河分 武士 選
澤 絢子
宮本 照男

特選 母の着し着物解きてリメイクし

腕に抱かるるような温もり

甘呂町 日和田 喜美子

(評)

「母の温もり」は幾つになっても忘れられない。生前の母の着物を仕立て直して着てみると、今でも母に抱かれるような温もりが感じられると言う。テーマに合わせた纏まりとリズム感が秀逸。

特選 馬酔木咲く近江の寺の廻廊に

あはゆき垂るる音をききをり

西今町 松本 トシ子

(評)

春につぼ形の小さな花を下垂状に付けている抑制したような控え目な馬酔木と近江の古刹の奥行きのある静けさを具体的にかつ的確な描写により余音嫋嫋と詠いあげた。格調ある作品となった。

特選 廃校の正門前に佇ちており

さんざめく児童らの声聞こえるや

長浜市 小谷 敏夫

(評)

永年にわたり児童らを見守り、よき人材を育成してきた学校の廃校。今その正門に佇む作者には、さんざめく児童らの声が聞こえ、万感が迫り来たのであろう。地域の歴史の一終止符に、尽きぬ懐旧の念と深い寂寥感が如実に詠まれ、地域民の情感の結集歌のようで重厚な秀歌。



入選 戦地の子無邪気に映るその刹那

円空佛の数多にかわる

日夏町 石原 不二子

(評) 戦地での無邪気な子どもが放映され、その刹那映像が円空佛に変わったのか、作者が心のなかで感じたことなのか。江戸時代に各地を遍歴して多数の仏像を刻んだ円空が浮かんだという。哀切の歌。

入選 北アルプス共に登った登山杖

今じゃ普通の杖になりけり

米原市 西尾 辰之

(評) 若い頃には飛驒の山脈と共に踏破した愛用の登山杖が今では日常生活に縋る杖になってしまったという。落差を杖をテーマに簡潔に纏めて、読者の共感を呼ぶ。「普通の杖」に実感が籠る。

入選 下校する乙女ら交わす十字路の

別れの言の葉散らす木枯らし

芹橋二丁目 古池 陽彦

(評) 歌は表現の具体が大切だが上三句の具体が生きて、結句へのリズムもゆるゆるとして「言の葉散らす」が切なくいじらしい余韻を与えている。簡潔表現の的確さと場面を摘まみだして見せるような一首である。

入選 緑濃き櫓の大樹風受けて

手足のごとく上枝動かす

中藪町 山川 美江

(評) ゆったりと揺れる櫓の小枝を新鮮な感覚で歌っている。擬人法で捉えつつ、同時に枝の尖端に着目したのがよかった。「手足のごとく」は作者のおだやかな心の動きでもある。日常は平凡なものに溢れています。

入選 限りなき未来に挑む人間の

技を忘るる今宵の満月

日夏町 寺村 享子

(評) 近年各国が急速に月探査の研究を進め、月面基地の建設計画まで立てられている。限りなき未来への挑戦も必要だが、月の賞美はその類ではない。結句「今宵の満月」に、その賞美が端的に詠まれ、読者をも優雅な宵に誘ってくれる詩情豊かな力作。

入選 寒けしも部活の子らの白き息

唸るバットに粉雪の舞う

大藪町 外村 輝夫

(評) 寒さを物とせず部活に打ち込む球児たちに、作者の温かいエールが込められた一首。一首全体の具体的かつ適確な表現に、その情景と子らの清純な姿が鮮明に浮かぶ。同時に精魂をこめ練習する球児への賞讃・激励も感じられ、深い共感が湧くよき歌。

佳作 呼び込みの声の明るき輪島朝市通りを

思い出しつつ募金をしたり

高宮町 細田 恵貢子

佳作 うなずきてただ聞くのみの介護なり

小さく割りたる菓子に茶を添う

本庄町 田口 洋子

佳作 如何ともし難き自然に身を置きて

瓦礫と化した能登を哀しむ

本庄町 田口 敏子

佳作 卓上の珠洲焼の茶碗に思ほゆる

被災の街の疾く復興を

古沢町 野洲 康雄

佳作 生も良し煮てもなお良し焼いて良し

朝採り野菜並ぶ食卓

長浜市 野口 成人

佳作 枝ぶりは老いたる剣士力溜め

花開きたる盆梅の意気

犬上郡多賀町 木村 正子

佳作 日脚すこし伸びたるゆうべ水の面に

のこる茜を走る鴨らは

正法寺町 高井 豊

佳作 夏の日のリハビリ器具の終了音

「エリーゼのために」そは和みゆく

東近江市 坂口 靖子

佳作 雨の日も傘差し散歩二人連れ

足の運動口の運動

地蔵町 佐古 徳子

佳作 手植え田の昭和遠しや母白寿

昔話の温し春来た

東近江市 藤本 修

佳作 久し振り生れ育った我が村の
旅人となりゆるゆる歩く

鳥居本町 寺村 美恵

佳作 飾り終え雛人形に手を合わす
母への感謝子らへの願い

犬上郡豊郷町 森 典子

佳作 千両をはるか超えそう小判草
道の駅には募金箱あり

東近江市 村上 定

佳作 ガラス窓花びらそっと貼り付きし
ふし床の老母^{はは}の声もほころぶ

稲里町 勝見 政恵

佳作 婿となる人よく話しよく笑ひ
炬燵へ崩す正座せし足

平田町 北村 浩子

佳作 千年の時を耐へ来し山中に
注連縄張られ神となる杉

東近江市 平田 三栄子



《総評》

今年も応募者は、彦根市、米原市、長浜市、東近江市、近江八幡市、犬上郡、愛知郡など広域から寄せられ、誠に喜ばしく思います。

テーマや歌の形態には個性ある作品が多くあり、選考には時間をかけて何度も読み返しました。

高齢で熟練された作品が多いと思いますが、若い世代の作品が中々見られないのが残念です。将来のことを考えますと、日頃から歌集を読んだり、多くの方々に歌会への参加をお勧めいたします。自分の歌がうまくなりたいと思ったら、歌会に出て、批評を受け、他人の歌も読んで関わりを深めることが大切です。

短歌はみじか歌ですが、感動を与え、心に染みる宝石のように輝く歌をつくるために、読み返し書き直し、推敲を下さい。

河 分 武 士

第六十回となる「彦根市民文芸作品」は、市民憲章の「歴史と伝統を生かし、文化の香り高いまちをつくる」を、市の総力を挙げ永年にわたり実践して来られた貴重な財宝であると、心よりお祝い申し上げます。

短歌部門では今年も日頃の情念を意欲的に真摯に詠まれた力作揃いで、深い歌意を読み解きながら慎重に選考させていただきました。

題材は、景観や四季、家族や地域に次ぎ、能登の震災や戦争が多く見られ、一年がよく反映されていました。

今後も時勢や日常生活での思いや願いをどう作歌していくか、題材の焦点化・詩情や韻律等に創意工夫されど健詠されますよう祈りいたします。岡野弘彦氏のお言葉「歌は生涯の心の伴侶」を糧にして!!

文化の香り高いまちのさらなるご発展をご祈念申し上げ、総評とさせていただきます。

澤 絢 子

今年も熱心な方々の応募作品を拝見できたことうれしく思います。近年応募者の数はやや少なくなつてさみしい感はぬぐえませんが、大事なものは応募者個々の作品の質です。日常の暮らしから見過ごしがちなものを作者独自の目線で表現したものも目にしました。読者が補つて読んでくれる余地を残して言い過ぎない（説明的ではない）ことの大切さを常に心がけて詩情に溢れた表現を工夫しつつ詠みつづけていただきたい。

宮 本 照 男



選者詠

花の生涯国を憂えし井伊大老の
歌碑さび翳ろう秋風のなか

河分武士

全盲のパラマラソンをめざす母に
息子は日々伴走父の遺志継ぐ

澤 絢子

ひたひたと鈍色の雲迫りくる
梅一枝のゆれる埋木舎

宮本照男

